

明治初期の理科の教科書

展示場4階の大阪の科学史コーナーに、「大阪^{せいみきく}舎密局」の展示があります。舎密局は、1868(明治2)年に大阪に作られた、日本で最初の近代的な化学の学校です。「舎密」はセイミと読み、オランダ語で化学を意味するchemieの音を漢字にあてています。

明治維新直後は、学校に関する制度の変更が続いたことから、舎密局も翌年には「理学校」さらには「大阪開成所」に改正され、残念ながら1872(明治5)年に理化学教育は廃止されました。

舎密局や理学校では、ヨーロッパの科学者が教授として招かれ、授業を行っていました。その時の講義録を日本語にして編集したものが、展示中の『理科新編』、『物理日記』(写真1)、『化学日記』(写真2)です。西洋の科学が体系的に導入され始めて間もない時代の先駆的な書物でしたから、教科書としてよく読まれたそうです。



写真1:『物理日記』

一見すると、文語体、しかも縦書きの文章に驚きますが、じっくり読むと、現代の中学校や高校で学ぶ事柄も多く、基礎的な事項が紹介されていることがわかります。

展示では、『化学日記』は、気体を集める方法である水上置換法を説明したページを開いています。また『物理日記』では、滑車を説明したページを読めるようになっていますので、縦書きの文章を読んでみてください。それぞれの事柄をご存じの方に

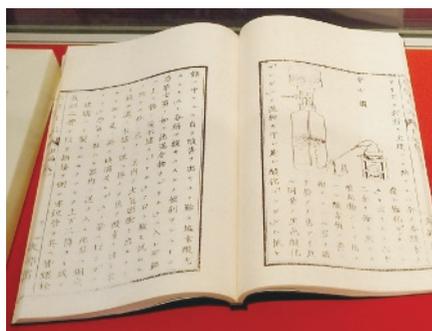


写真2:『化学日記』

は、親しみのある内容かと思います。

今から150年ほど前、西洋から入ってきた新しい科学を学んでいた人々を想像しながら、昔の教科書をご覧になってみてはいかがでしょうか。

嘉数 次人(科学館学芸員)